

## 上野国・戦国時代その3

### 上州の黄班（トラ）猛将・長野業政

赤榛分水工から榛名山東麓を南北に南下する榛名幹線の下流22km程に相馬揚水機場があります。この立地場所は箕輪城の史跡内にあり県の文化財指定を受ける土地の中に揚水機場があります。

今回はこの箕輪城の城主であった長野業政（業正）に纏わるお話です。

#### 1. 上野国・長野氏

長野氏は、戦国時代に西上野で勢力を伸ばした大身の武士・武家であり関東管領山内上杉氏の中でも有力武将として活躍した一族です。

鎌倉御家人ではなく、在庁官人（ざいちょうかんじん）として上野国群馬郡長野郷（現：群馬県高崎市浜川町周辺）が本拠地であったことで、長野姓を称したと伝わっています。

長野氏の名が歴史上の資料で記されているのは「長尾景春の乱」の中で文明9年（1477年）5月7日、武蔵針谷原（埼玉県岡部町）で山内・扇谷山内氏と長尾景春方として戦い、討ち死にしている長野為兼の名が、また、永正元年（1504年）の立河原（東京都立川市）の戦いでは長野孫六郎房兼が上杉顕定方で参加し、戦死していることが記されています。

ただし、房兼・為兼は現存する系譜には記載されておらず、血縁関係は不詳となっています。戦国時代中期までは上野国は関東管領及び上野国守護である山内上杉氏の領国であり、守護代の長尾氏（白井・総社長尾家）も本拠地を上野国としていたため、長野氏は上野国西部の豪族・国人衆を取りまとめ、「箕輪衆」として守護及び守護代に仕えていたと思われます。

#### 2. 厩橋長野氏（うまやばしながのし）

上杉氏、長尾氏が長期化する戦乱の中で衰退していくのとは対照的に長野憲業が箕輪城を築城するなど長野氏は西上野を中心に勢力を拡大させ、大永7年（1527年）には長野左衛門大夫方斎が厩橋宮内大夫とともに総社城にあった総社長尾氏の長尾顕景を攻撃しています。長尾家は主家筋ではありますが、この頃の上野国は山内上杉家を中心にま





とまってはならず、恒に内紛を抱えていた状況にありました。

厩橋宮内大夫の一族は厩橋城（前身は石倉城の一部、後に前橋城と改称）を築き利根川を挟んで対岸にある総社の長尾氏と対抗していました。厩橋城主となった厩橋長野氏は厩橋の東隣大胡郷へも進出し、大胡氏に代わって赤城山南麓の大胡領をも支配し、大胡氏を一族化したとも云われています。

長尾景虎（上杉謙信）が関東平定に越境してくるとこれに従いますが、一説

には景虎が侵攻して来たときに後北条方につき、上杉勢の攻撃を受けて降伏し、「衆」が解体されたとも考えられています。その後、厩橋長野氏、大胡長野氏は厩橋城及び大胡城を上杉氏に没収され没落してしまいます。

### 3. 上野の虎・長野業政（業正）

箕輪城主となった箕輪長野氏は憲業のとき西上野方面に進出し、次男業正（業政）の時に強大勢力となりました。業政は長尾氏の家督相続に介入するなど山内上杉氏家中で台頭し、河越夜戦や笛吹峠の戦いで北条氏康や武田信玄に大敗した関東管領上杉憲政が武蔵国の最前線である御嶽城を取られ上野国を追われて越後へ逃亡した後も箕輪衆を纏めて西上野の支配圏を維持しました。



業政は憲業または信業の子として

生まれ箕輪城主となって鷹留城（現：高崎市下室田）を支城として周囲の小豪族や国人をとりまとめ、12人いたとされる娘を周辺豪族との姻戚関係を結ぶことで箕輪衆としての結束を固めていきました。また、武人としてもその才能は高く評価され、西上野進出を目論んだ武田信玄を再三に亘り追い払い、「上野国に長野業政が居るかぎり攻略は難しい。」と信玄に言わしめたとも伝えられています。

その遺言も熾烈を極め、死去する前に嫡男である業盛を枕元に呼び寄せて「自分が死んだら一里塚と変わらぬ墓をつくり法要は無用。敵の首を墓前に一つでも多く供えよ。敵に降伏してはならない。運が尽きたら潔く討ち死にせよ。」と遺言したと伝わっています。

上杉憲政が北条氏康に大敗した河越夜戦にも連合軍として参戦し、この時に長男の吉業が負傷し箕輪城まで敗走しています。その後憲政は失地回復を図るため信濃国へ援軍



を送り武田信玄を倒して勢力回復を狙いますが、業政はこの作戦に異を唱え、参戦せずに無為な戦を避けるよう憲政を説得しますが、憲政は作戦を強行し、戦いに敗れ、新たに武田家を敵に回す事態となり、さらには北上してきた北条氏康にも敗れると長野業政は一族もろとも憲政から離反し、憲政は上野国を追われることとなってしまいました。氏康は憲政の居城であった平井城に城代をおき、更に厩橋城、沼田城を攻略して

いきましたが、業政は北条に屈せず、長尾景虎の関東侵攻を待って反撃に望みをつなぎました。

#### 4. 武田信玄・西上野侵攻

越後に逃れた上杉憲政は越後国を統治していた長尾景虎に家督と関東管領職を譲ってしまいました。これに危機感を覚えたのが武田信玄で信濃国川中島で幾度となく対峙し抗争してきた長尾景虎が関東管領職を得たことにより関東に進出してくることは明らかであり、今まで信濃・越後国境を防備することで越後勢の侵攻を食い止めていたものが、信濃・上野国境方面への対応をしなければ信濃・甲斐国への侵略の恐れがあるため、これに対応すべく西上野侵攻を画策しました。



まず、上杉憲政から離反し、西上野一帯を支配する長野業政に味方になるよう内応の要請を行いました。業政はにべもなくこれを断り、管領再興を名分として北条・武田に対抗するため西上野の武士団を結集し、その勢力は20,000人を超える勢力となりました。

弘治3年（1557年）4月信玄の嫡子・義信を大将として余地峠を13,000の兵力で攻め込んできました。これを迎え撃った業政は、先陣を叩いて進軍を止めると箕輪城に引き返し籠城作戦をとり武田軍の矛先をかわしました。翌永禄元年（1558年）信玄自ら軍を率い上州侵攻を再開しましたが、この時たまたま吾妻方面に出兵していた業政は、ただちに兵を帰し、夜営中の武田勢を急襲し、折からの強風を利用して風上からの火攻めを行い、信玄は命からがら甲斐に逃げ帰りました。

やがて、山内憲政を庇護していた長尾景虎（上杉謙信）が、永禄3年から翌年にかけて

て関東に出兵してくると、北条方に落ちていた旧上杉関東管領の所領であった名胡桃城（みなかみ町）・沼田城（沼田市）・白井城（渋川市）・厩橋城（前橋市）等の諸城を攻略し、厩橋城に関東における拠点を置いて関東各諸將に北条討伐の号令を下し、参陣を求めました。長野氏は箕輪衆、厩橋衆を率いてこれに参陣しました。



一時は相模国北条氏の本拠地小田原城を包圍するも落城までにはいた

らず、やがて北条氏と同盟を結ぶ武田氏が川中島で軍事活動を開始し、これに対応すべく景虎は占領した主要な城に城代を置き、武田勢への対応のため越後に引き返してゆきます。

西上野での度重なる敗戦で武田信玄は再度の侵攻に備え、上杉謙信を川中島で牽制し、謙信の関東出兵が及ぶ前に西上野へ侵攻し、永禄4年（1561年）5月に20,000人の兵力を持って鷹留城を攻撃し、さらに箕輪城に攻め寄せました。しかし、箕輪城を落とすことは叶わず、またもや敗退を余儀なくされてしまいました。信玄はこの時の長野方の戦術の変化に気づき、業政の死を直感していました。すでに業政は病没しており、長野勢はこれを秘して戦っていたのでした。

## 5. 箕輪城落城

長野業政が没したのち、14歳の嫡子・業盛が家督を継いで箕輪城主となりました。永禄4年（1561年）武田軍の攻撃は撃退したものの、信玄の西上野侵攻はさらに激しさを増し、同年11月には小幡氏（甘楽郡甘楽町：小幡郷）が武田軍に従属し「箕輪衆」の一角が崩れることとなりました。永禄7年（1564年）になると、倉賀野城、安中・松井田城があいついで落城し、箕輪城間近まで迫ってきました。翌永禄8年には箕輪城を初め総社・白井などの諸城を攻略するため出陣してきました。永禄9年総攻撃を開始した武田軍は箕輪城の支城である鷹留城との分断を謀り、一斉攻撃による各個撃破で長野軍を追い込み、箕輪城を包圍して圧力をかけ続けました。

城兵は、城門を開いて打って出ては撃退され、城に残る城兵も数が少なくなり、長野業盛は覚悟を決めて父である業政の遺言どおり自害して果て長野氏は滅亡しました。

箕輪城落城は、武田信玄の上野支配を確実なものとししました。しかし、西上作戦で上洛を目指す途上で信玄が没すると上野国に再び北条氏の圧力がかかり、武田、上杉、北条の陣取り合戦が開始されることとなりました。

★在庁官人（ざいちょうかんじん）

平安中期から鎌倉期に国衙行政に従事した地方官僚の総称で、中央覇権の国司が現地で採用する実務官僚であり国司の側近としての性格があった。国司の現地赴任が無くなると、強力な力を持ったものは在国司とも呼ばれた。

★箕輪城

群馬県高崎市箕郷町にある国の史跡に指定されている平山城で、日本100名城になっている。1512年（永正9年）長野業尚によって築かれた。1526年（大永6年）業尚の子、信業によって築かれたとの説もある。

1566年（永禄9年）武田信玄に敗れ落城した後は、武田軍の上野国経営の拠点となった。



箕輪城石碑